

曠野へ

宮坂静生



凧仰ぐ軀の弓なりのかぎりなし
凧揚げし順に深空へ惹かれ逝き
凧唸る旅の終りの上紺に
波のむた八十余年狂ひ凧
繭団子ひとつひとつに歎歎のこゑ
鞆の拇おゆ指びが親の棲み処かも



頭を撫でて逝くひとおくる花の内
大寒の曠野へ百合の種子真赤
百合の種子飛ばせる寒の満マン州チュ里リ
胆嚢に胆石あばれ寒土用
カトレアへ真夜中の慈雨吹きかけつ
晩年へ憧れ林檎日に一個
待春や起床ラッパの世は微塵
書痴二月書淫三月四月馬鹿